

高校生が地域のシカ問題に取り組む

群馬県立尾瀬高等学校 理科部

現在、ニホンジカの増加と分布拡大により、農林業だけでなく、生態系への影響が深刻化している。私たちのフィールドである尾瀬もシカの影響を受けずに成立した環境だったのが、1990年代から現われはじめたシカにより、植生への影響が生じている。私たち尾瀬高校理科部はこれまで尾瀬ヶ原などで毎月シカのモニタリング調査を行いその生態を調べてきた。その調査を通して、シカ個体数の季節変化や植生への影響を明らかにしてきた。

調査活動だけでなく、植生の保護や回復活動も行っている。尾瀬の植物は希少な生態系の構成種であると同時に、地域にとっては重要な観光資源でもある。私たちは尾瀬の保護のため、様々な地域の方々と協力関係を結んでおり、例えば環境省関東

地方環境事務所とも連携協定を結んでいる。その活動の一環として、尾瀬ヶ原において植生保護柵の設置に協力している。ニッコウキスゲなど、尾瀬の観光資源保護と回復がねらいだ。尾瀬の大清水湿原という場所ではミズバショウ群生地での回復活動を地元企業と連携して行っている。ここは、最盛期には2万株ものミズバショウがあったと言われ、以前は多くの観光客でにぎわった。しかし、現在では環境変化やシカの食害により数百株まで数を減らしている。私たちは地元企業や農家の方から指導をもらい、ミズバショウを種から育て、移植を行っている。また、地元酒造会社の協力により、日本酒の売り上げの一部が活動資金と



チームメンバー

して寄付されている。

この問題の根本的な解決に高校生が直接かかわることは難しいが、今後も地域の様々な方と連携をすることで少しでも解決に貢献していきたい。

群馬県立尾瀬高等学校 理科部

調査研究活動と体験交流活動を地域の自然の中で行っている。部員数40名で全校生徒の3人に1人は理科部。全国から生徒が集まっており部員の出身地は13都府県にまたがる。個性だけでなく方言も豊かな集団である。

GEOC/EPOからのお知らせ

GEOC常設展示

「自立・分散型の社会をつくり、地域間で支え合う“地域循環共生圏”」

環境・経済・社会が統合的に循環し、地域の活力が最大限に発揮され、地域でのSDGsの実践（ローカルSDGs）を目指す“地域循環共生圏”。全国の地域で進んでいる取組の今をお伝えします。



つな環編集部

星野智子、尾山優子、江口健介、浦林貴子、高瀬裕子、鈴木良壽、
今井麻希子（順不同）

つな環

検索

「つな環」はインターネットからもご覧いただけます。
http://www.geoc.jp/information/tsunakan